

## 論文内容の要旨

|  |    |    |       |
|--|----|----|-------|
| 報告番号   | 空欄 | 氏名 | 矢田 憲孝 |
| Plasma level of von Willebrand factor propeptide at diagnosis: a marker of subsequent renal dysfunction in autoimmune rheumatic diseases<br><br>(和訳) 診断時の血漿中von Willebrand因子プロペプチドは自己免疫性リウマチ性疾患における腎機能障害発症の予測因子となる |    |    |       |

### 論文内容の要旨

関節リウマチ、全身性エリテマトーデス (SLE)、シェーグレン症候群、全身性硬化症などの全身性自己免疫性リウマチ性疾患 (SARD) の慢性炎症性疾患では、血管内皮障害に関連する腎機能障害を発症することがある。フォンヴィレブランド因子 (VWF) は、血管損傷部位の一次止血に重要な役割を果たし、炎症、免疫系、血管新生も制御するとされる。VWFプロペプチド (VWF-pp) は、血管内皮が刺激されるとVWFと共に血中に放出され、その血漿中濃度は血管内皮活性化のマーカーとなり、血管内皮障害や臓器障害の指標となる可能性がある。今回、63名のSARD患者について診断時のVWF-pp値を測定し、1年以内の腎機能障害の発症を識別するマーカーとして有用であるかを検討した。SARD患者では健常者と比較して診断時のVWF-pp増加とADAMTS13減少がみられ、特にSLE患者群でVWF-pp高値を示した。一方で、VWFおよびVWF多量体パターンについても検討したが、これらについては有意な差はみられなかった。さらに、多変量解析において、VWF-pp上昇は腎機能障害の発症に関する独立した危険因子であった。SARD患者において、VWF-ppを評価することで腎機能障害発症のリスクを早期に予測することが可能となり、血管炎および腎機能障害を予防する新しい治療アプローチにつながる可能性が示唆された。